

## 第Ⅳ部 他動詞的表現の諸相

### 第6章 行為を表す動詞をめぐって

### 第7章 他動詞表現と介在性

第Ⅳ部は他動詞的表現の諸相を論じるものである。

第6章は、他動詞的表現の中で意味が透明で使用頻度の高い和語である「(～を)スル」と「ヤル」という形式に注目する。この2つの形式は多くの重なり合う部分を有する一方で、異なる振る舞いをみせる部分も少なくない。本論は両者の違いに焦点をあてることによって、これらの本質的な性格を明らかにする。

第7章は、他動詞的表現に特有の(つまり自動詞的表現にはみられない)意味的な現象を論じる。「山田さんは家を建てた」のように、自らが手を下していないのにあたかも主語の指示対象自身が当該の行為を行ったかのように解釈することのできる文に関し、話者のとらえ方の次元から2つの成立要因がからんでいることを明らかにする。

## 第6章 行為を表す動詞をめぐって<sup>(1)</sup>

### 1. はじめに

通常、文の述語としての動詞は当該の文において統語的に中心的な役割を担うばかりでなく、意味的にも主体の行為や変化のあり方を叙述するうえで非常に重要な機能を果たしている。しかしながら、一部の述語動詞は当該の文における他の連用成分との組み合わせによって行為や変化などの具体的なあり方を述べる度合いが相対的に強い。

- (1) グラスが 粉々に なった。 (≒砕けた)
- (2) 試験車が 走行を した。 (≒走った)
- (3) 子供が 父親の まねを やった。 (≒まねた)

例えば(1)では、述語動詞「なった」だけでは主体「グラス」の被った変化のあり方は具体的にはわからない。しかし、連用成分「粉々に」との組み合わせによって変化の結果の状態をより精密に記述している。つまり、「粉々になった」という語句の組み合わせによって、「砕けた」という一語にほぼ相当する意味を実現しているといえることができる。また、(2)では、連用成分「走行を」と述語動詞「した」との組み合わせによって「走った」という一語にほぼ相当する意味を実現しているとみることができる。(3)も同様である。

日本語の「する」と「やる」はともに行為を表しうる和語であるが、意味的には無色透明に近く、用法の上でも重なりあう部分が多い。また、双方とも使用

頻度が非常に高いという点で重要な語彙項目である。本章は、行為を表す場合の「する」と「やる」とりあげ、それらの用法・意味などの異同に注目することによって、それぞれの構造上の相違や本質的な性格を明確にしようとするものである。

## 2. 現象の概要

### 2.1. 用法の分布

「する」と「やる」はともに使用頻度の高い語彙項目であるが、相対的に「する」の方が使用範囲が広く、用法のバリエーションは多岐にわたっている。本章は、「NPガ NPヲ V(する/やる)」という形式をとる用法を考察の対象とするが、その他にどちらか一方にしかない用法も存在する。以下に「する」と「やる」のどちらか一方にしかない用法をその形式に注目して示す。

#### (4) 「する」にあつて「やる」にみられない用法

##### a 「NPガ V(する)」という形式(明らかに自動詞相当)

においがする、感じがする、めまいがする、気がする、予感がする、  
感触がする……

##### b 「NPガ NPヲ NPニ(変化の結果) する」という形式

(部屋を)きれいにする、(息子を)医者にする、(牛乳を)チーズ  
にする、……

#### (5) 「やる」にあつて「する」にみられない用法

(「NPガ NPニ NPヲ V(やる)」という形式をとり、物の授与

を表す用法)

子供にお年玉をやる、猫に餌をやる……

両者の用法の分布の決定的な相違を一言で述べるならば、「やる」が必ずヲ格をとる他動詞専用の形式なのに対し、「する」は(4a)にみるような自動詞用法もみられるという点である。また、(4b)に示した変化を表す構文や(5)に示した物の授与を表す構文はそれぞれ、「する」と「やる」にしかみられないものであるが、なぜこのような用法の分布上の相違があるのかという点については後に言及したい。

## 2.2. 考察対象の概観

本章で扱う「NPガ NPヲ V(する/やる)」という形式の「する」と「やる」をめぐって、現象の概要を観察しておきたい。行為を表す「する」と「やる」はどちらを使っても十分に自然で、しかも意味の違いがほとんど感じられないものが少なくない。

(6) これからテストを{します/やります}。

(7) 彼は一生懸命に勉強を{している/やっている}。

しかしながら、一方が適切であるにもかかわらず、他方が不自然な場合もある。以下に示す(8)と(9)は「する」のみが適切であり、(10)と(11)は「やる」のみが適切である。

(8) 私がにらみつけると男はいかにもぼつの悪そうな顔を{した/\*やっ

た)。

(cf. おじさん、またお猿さんの顔を{して/やって}。)

(9) 二人は仲良く握手を{した/\*やった}。

(10) 今、10チャンネルで何を{やって/\*して}いる？

(cf. 坊やお外で何を{やって/して}いる？)

(11) 大浜先生は軍事史を{やって/\*して}いらっしゃる。

興味深いことに、(8)は「する」のみが適切な例だが、cfにみるように同じ「顔」というヲ格の名詞をとっていても両方とも適切になる場合もある。また、(10)は「やる」のみが適切な例であるが、cfにみるように同じ「何」というヲ格の名詞をとっていながらも「する」も適切になる場合がある。このように、「する」と「やる」の使い分けは非常に微妙な条件によって左右されるのである。

### 3. 統語・形態面の特徴

本章は、「する」と「やる」の異同を形式(統語・形態)と意味のそれぞれの側面から考察するが、本節ではさしあたって、形式の面から考える。

#### 3.1. 単純型と複合型

「する」に関して、田野村(1988)は以下のような現象を論じている。

(12) a 部屋の掃除を する。

(単純型)

b 部屋を 掃除する。

(複合型)

- (13) a 入管が 荷物の検査を した。 (単純型)  
 b 入管が 荷物を 検査した。 (複合型)
- (14) a 我々は 言語の研究を している。 (単純型)  
 b 我々は 言語を 研究している。 (複合型)

上の(12a)は「する」という動詞が単独で用いられているが、(12b)では主体の動作のあり方を示す語句「掃除」と「する」が一語に融合している。従って田野村(1988)は、前者のようなタイプを「単純型」、後者のようなタイプを「複合型」と呼んでいる。このように、「する」に関しては、ある場合に上のような言い替えが可能であることがいくつかの先行研究で指摘されている(2)。

他方、「やる」に関して同様の観察をするとどのようなことが言えるだろうか。

- (15) a 部屋の掃除を やる。 (単純型)  
 b \*部屋を 掃除やる。 (複合型)
- (16) a 入管が 荷物の検査を やった。 (単純型)  
 b \*入管が 荷物を 検査やった。 (複合型)
- (17) a 我々は 言語の研究を やっている。 (単純型)  
 b \*我々は 言語を 研究やっている。 (複合型)

(15)から(17)のb文にみるように、「やる」は決して複合型を成立させない。この点は、「する」とは大きく異なった特徴として指摘することができる。

### 3.2. 語彙項目の形成

次に「する」と「やる」の形態論的な振る舞いの違いとして、語彙項目の形成

という点を指摘したい。影山(1993)などの指摘するように、「する」は動作を表す実質的意味の部分と融合して単独の語彙項目を形成する場合がある。

(18) 愛する、熱する、処する、律する、評する、……

これらの動詞は多かれ少なかれ、五段動詞としての資格を有している。「多かれ少なかれ」というのは、いわゆる「言葉のゆれ」の問題であるが、年代などにより活用の判定の仕方に個人差がみられるからである。これらの中で、「愛する」は最も五段動詞化が進んでいるものである。

(19) 愛する → 愛さない、\*愛しない

「愛する」がサ変動詞であるならばその否定形は「愛しない」となるはずであるが、実際には「愛さない」である。これは完全に五段動詞化していることを意味するものである。

他方、(18)にあげた他のものは活用の判定に個人差が著しく、五段動詞化の途上にあるものとみなすべきであろう。一例として、「熱する」の否定形について考えてみよう。

(20) 熱する → (?)熱さない、 (?)熱しない

「熱する」に関しては、いずれかの否定形の方が一概に正しいとも言い切れない、「言葉のゆれ」の一事例である。ただここでの議論では、「する」には五段動詞化する場合があるという事実が重要な意味をもっている。つまり、五段動詞化して活用のタイプが変わるということは新しい語彙項目が形成されていることを意

味するものだからである。

一方、「やる」は上のような形で語彙項目を形成することは決してない。

(21) 演技をやる→\*演やる (演技をする→演ずる)

「やる」はこのような形で語彙項目を形成することは決してない。この点も「する」と「やる」の大きく異なる点である。

### 3.3. 統語・形態面のまとめ

第3節では、「する」と「やる」の形式的側面からの特徴として、いわゆる「単純型」と「複合型」の言い替えの問題、及び語彙項目の形成という点をみた。結果として、「やる」は「する」と異なり、「複合型」を成立させず、語彙項目の形成をなさないということがわかった。これらの点をまとめるならば、語結合という点において顕著な違いがあるということが指摘できる。すなわち、「する」の場合は、「複合型」を成立させ、語彙項目を形成するなど、動作を表す実質的意味の部分と結合しやすい。これに対し、「やる」は実質的意味の部分と結合しにくく、その意味で自立性が高いということが指摘できる。

## 4. 意味的特徴

この節では、「する」と「やる」の異同を意味的な側面から考察する。これに際して、「意図性」、「動作性」、「ヲ格名詞の意味的性質」の3つの要因に注目する。

#### 4.1. 意図性

意味的側面からの考察としてまず、主体（主格名詞句の指示対象）に当該の行為遂行にあたって意図性があるかどうかという点からみる。まず以下の具体例から検討したい。

(22) a 太郎がくしゃみを {した / \*やった} 。

b 太郎がわざとくしゃみ（のまね）を {した / やった} 。

(23) a 厳しいことを言われたので彼は悲しそうな顔を {した / \*やった} 。

b わざとお猿さんの顔を {した / やった} 。

(24) 徹夜明けだったので、太郎は授業中に居眠りを {した / \*やった} 。

(25) 足を滑らせて崖から転落を {した / \*やった} 。

上に挙げた例のうち、(22a), (23a), (24) 及び (25) は主体が当該の行為の遂行を意図的に行っていないものである。このような場合に「やる」を使用するのは不適切である。(22b), (23b) のように、意図性を含意する文脈を与えると「やる」の使用も適切になることから、この要因が作用していることがわかる。つまり、「意図性」の要因は「やる」を適切に使用するための必要条件であるということが出来る。他方、「する」に関しては、意図性という性質は作用していない。「する」は(22a), (23a) のような非意図的な場合にも、(22b), (23b) のような意図的な場合にも適切に使用することができるのである。

#### 4.2. 動作性

意味的側面からの考察として次に、当該の行為が動作性のものであるか否かという観点からみる。以下の例を検討しよう。

- (26) 太郎は後輩たちに期待を{している/\*やっている}。
- (27) 私が信用を{した/\*やった}のが間違いだった。
- (28) 彼は子供の頃の回想を{している/\*やっている}。
- (29) 彼は今ごろとても後悔を{している/\*やっている}だろう。

上に挙げた(26)から(29)は、いずれも典型的な心的行為を表すものである。このように、非動作性の場合、「やる」は成立しない。更に以下の例を検討しよう。

- (30) a ?我々はこのような言語現象の検討をやっている。
- b 我々はこのような言語現象の研究をやっている。

(30a)は(30b)と比較して、若干座りの悪い表現である。両文は、「検討」と「研究」という部分においてのみ対立するものであるが、これも「動作性」という要因に起因するものである。両者とも「意図性」という要因に関しては条件を満たしているものの、「動作性」に関しては若干の違いがある。「研究」という行為の内容は心的行為の側面も含むものと思われるが、その他に実験や調査などの行為をも含むことができる。例えば、言語調査のフィールド・ワークを行っている者が、「今、研究をしている」と言うことはできるが、「今、検討をしている」と言うことはできないだろう。このように、「やる」は動作性を解釈しにくい場合には使用しにくいのである。

また、「する」に関して述べるならば、「動作性」という要因はその成立に関与しない。

(31) a 我々はこのような言語現象の検討をしている。

b 我々はこのような言語現象の研究をしている。

(30)の「やる」と異なり、「する」は(31)にみるように動作性の有無とは無関係に成立するのである。

以上、「動作性」の要因に関して考察し、この要因が「やる」の必要条件として機能し、「する」の成立には関与していないことをみた。

#### 4.3. ヲ格名詞の意味的性質

意味的側面からの考察として最後に、「ヲ格名詞の意味的性質」という観点から考える。具体例の観察から始めたい。

(32) 大浜先生は日本の軍事史を{\*している/やっている}。

(33) 君は33ページまでを{\*してください/やってください}。

(34) (ヤクザのボスが殺人を命令する場合)

むこうの組長を{\*しろ/やれ}！

(35) いま、10チャンネルでは何を{\*している/やっている}？

上の例ではいずれも、「する」は不適切で、「やる」は適切である。これには下線をほどこしたヲ格の部分にその原因がある。以下の例と比較してみよう。

(32)' 大浜先生は日本の軍事史の研究を{\*している/やっている}。

(33)' 君は33ページまでの翻訳を{\*してください/やってください}。

(34)' むこうの組長の殺害を {しろ/やれ} !

(35)' いま、10チャンネルでは何の放送を {している/やっている} ?

(32)' から (35)' はそれぞれ (32) から (35) までと対応するものであるが、二重下線をほどこした部分にみるように、ヲ格が動作を表す名詞になっており、その場合には「する」が適切になる点が注目される。つまり、ヲ格の名詞句が動作を表す意味のものであれば「する」も可能であるが、それ以外の場合 ((32-35)) は「やる」のみが適切になっているのである (3)。

#### 4.4. 意味的特徴のまとめ

第4節では意味的側面からの考察をしたが、その結果は以下のようにまとめられる。

#### (36) 意味的特徴のまとめ

	意図性	(行為)の動作性	ヲ格名詞の性質
する	±意図性	±動作性	±動作名詞
やる	意図性	動作性	±動作名詞

以下、なぜこのような結果がえられたのか考察するが、上の表のうち網掛けをほどこした部分が特に重要な意味をもっている。なぜならば、+の素性を示して

いるところがそれぞれの動詞の積極的な特徴を示しているからである。

## 5. 「する」と「やる」の本質的性格

ここまで、「する」と「やる」の異同を形式と意味のそれぞれの側面から観察してきた。何故このような結果がえられたのかという点を、「する」と「やる」のそれぞれの本質的な性格と照らし合わせながら考えていく。

### 5.1. 「する」の本質的性格

ここまでの考察で「する」は、単純型の他に複合型の言い替えの可能な場合のあること、語彙項目の形成をなす場合があること、ヲ格名詞句が典型的に動作性の意味の名詞でなければならないことなどをみた。「する」がこのような特徴を有するのは、この動詞が意味的にはほぼ無色透明で、動詞としての特徴を形式的にしか有していないからにほかならない。「する」は形式動詞と呼ばれることもあるもので、独自の項構造をもたないなどの点で他の動詞とは大きく性格を異にしている(4)。一般に通常の動詞で、主体の行為のあり方を叙述する実質的意味は動詞の語幹の部分が担うものであるが、「する」という動詞自体は意味的にほぼ無色透明で、事実上、実質的意味は格成分などの連用成分が担っている。

(36)に示したように、「する」は「意図性」、「(行為の)動作性」といった意味的特徴に無頓着であるが、これはこの動詞が意味的に無色透明な形式動詞であることの反映にほかならない。また、ヲ格の名詞句が典型的に動作性の意味のものであるのは、実質的意味を「する」自体が担っておらず、ヲ格の名詞句にこの機能をゆだねているためである。更に形式的特徴として、「複合型」と語彙項

目の形成が可能であることも、形式動詞としての性格の反映である。動詞としての特徴を形式的にしか有していない「する」は、実質的意味を担う部分と融合することが可能なのである。

本章は「する」を「やる」との対比を念頭において考察したため、「～をする」という形式に焦点を当てたが、(4)に示したように自動詞としての用法もある。意味的に無色透明な「する」は、他動性という点においても中立的である。

## 5.2. 「やる」の本質的性格

「やる」の本質的性格とは、意味的に抽象度の高い行為指向の他動詞である。ここでいう「行為指向」とは対象の変化の結果よりも動作主の行為に焦点を当てているという意味である。「やる」は確かに通常の動詞と比較すると実質的意味の抽象度が高いが、決して「する」のような形式的な動詞ではない。「やる」の語幹の部分が担う実質的意味とは、(36)に示されるように「意図性」と「動作性」という他動詞として非常に基本的な性質である(5)。通常の他動詞と異なるのは、動作主の動きのあり方やそれによって引き起こされた対象の変化の結果のあり方などを特定していないという点のみである。

(36)にみるように、「やる」のヲ格名詞句が動作性の意味のものでなくてもかまわないのは、「する」と異なり、「やる」の場合は実質的意味を担う機能を他の連用成分に依存する必要がないためである。「やる(yaru)」の語幹の部分yarは意図的で動作性の働きかけという実質的意味を担っているのである。また、「複合型」を成立させず、語彙項目の形成をなさないという点も、実質的意味を有する通常の他動詞であることからの当然の帰結なのである。

「やる」は(4b)に示したように、対象の変化の結果に焦点を当てた構文には使用できない。この動詞は本質的に動作主による行為の側面に焦点を当てるもので

ある。本章の中心的な考察の対象からははずれたが、「やる」には(5)に示したような物の授与を表す用法がある。通時的な考察によれば、このような用法は本章が中心的に扱った純粹に行為を表す用法から派生的に生じ、授受動詞の体系に組み込まれたものと考えられている(6)。「やる」の本質は実質的意味の抽象度の高い働きかけを表す通常他動詞であると考えられるのである。

## 6. おわりに

本章は用法の上で重なりあう部分の大きい「する」と「やる」をとりあげ、その異同を明らかにし、両者の本質的な性格などについて考察した。両動詞の相違は、前者が動詞としての資格を形式的に有しているにすぎない形式動詞という特殊な位置づけをされるべきものであるのに対し、後者は意味的な抽象度が高いものの通常他動詞の1つにすぎないという文法的なレベルの違いに負うところが大きい。

日本語の文法研究の分野において伝統的なテーマの1つに「は」と「が」の使い分けの問題がある。この2つの助詞の違いは前者が係助詞と呼ばれるカテゴリーのものであるのに対し、後者が文内の構造を示す格助詞というレベルの異なるカテゴリーに属するという点が根本的である。本章の扱った「する」と「やる」も重なりあう部分があるものの、文法的にレベルの異なるものであるという点は同様である。